



2011年
(平成23年)
8月22日
月曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net

第十号

三宅島大学、開校日決定！！

「三宅島に、大学ができるらしい。」そんな噂が、少しずつ三宅島で伝わってきていることを聞き、嬉しく思う。「三宅島大学って、何なの？」この疑問に、答えていく日が着々と近づいてきている。

この『あしたばん』が創刊された、二〇一一年六月の三宅島大学リサーチから、約二ヶ月が経つ。いよいよ三宅島大学の開校日が決定した。開校日には「開校記念式典」が行われ、記念スペシャル講座も開かれる予定だ。この開校式に向けて、入学者を募集するチラシが全島配布された。

記念すべき「三宅島大学」のはじまりの日。式典は二〇一一年九月十九日(月・祝)、阿古船客待合所にて行われる。ぜひ、多くの方々に足を運んでいただきたい。気持ちのよい三宅島の海をバックに、式典が行われることが今から楽しみだ。

(大西 未希)

『あしたばん』

Tシャツプロジェクト

開校にあわせ、『あしたばん』Tシャツが誕生。海・山・森にちなんで3色(ディープブルー・ダークブラウン・アイビーグリーン)展開予定。『あしたばん』への愛着が増しそうな一枚だ。これを着て、『あしたばん』を読もう！



三宅島大学プロジェクト実行委員会 × 東京アートポイント計画 東京文化発信プロジェクト

三宅島大学開校！ 入学者大募集！

開校記念式典
2011年9月19日(月・祝)
阿古船客待合所

開校記念スペシャル講座 参加者募集
副村家 近藤良平さんと一緒に三宅島で語っちゃおう！



島でまなび、島でおしえ、島をかんがえる。島がキャンパス！
三宅島大学

三宅島大学とは
島全体を「大学」に見立て、さまざまな「学び」の場を提供する参加型の仕組みです。「大学」が開講する講座やプログラムを通じて、島内外の人々が出会い、のびのびと語り「学び」の場をつくります。島をキャンパスとした三宅島大学は、誰もが入学でき、誰もが先生になることができる、ユニークな「大学」をめざします。

「三宅島」島民四人と一びき写真展

アイランドシック 帰りたくなったよ

「三宅島が好きだからだよー！」
「どうして、島に帰りたいと思ったの？」

「三宅島が好きだ！」という思いであふれているみたいだ。

わたしはまだ、三宅島の初夏から夏の季節しか知らない。それでも、まるで絵で描いたような鮮やかな青の海や、雨上がりのあとの大きな空。歩いていて、はっとする景色に何度も出会って「三宅島に来られて、よかった」と思った。

この大自然のなかで生きる、島民のみなさんに学びたいことがたくさんある。一度出会ったら、アイランドシックになってしまおう三宅島。またその種に出会えていくんだろうと、今日の三宅島を想像しながら新宿をあとにした。

(大西 未希)

感想はもう、「アイランドシックになった」の一言。アイランドシックという言葉は、シュガーさんの発想から出た言葉だそうで、島から離れたときのホームシックのような気持ちのこと。海にかかった大きな虹、ペンションのみなさんの笑顔の集合写真、穏やかな波、新鮮な貝…。写真のどれもに、



神着太鼓の 勝手な分析

私は、三宅島の二回目のリサーチで富賀神社大祭の際に神着地区で叩かれる太鼓の練習を目撃しました。僕は作曲家として、三宅島大学のプロジェクトに参加していますが、実はドラマーとしての顔も持っています。なので、太鼓がなると胸が騒ぎます。この日は神着地区の太鼓がどのように叩かれているのかじっと観察したので、その結果を記事にしようと思います。

まず、神着地区は大太鼓を低い位置に配置して、叩き手は腰を低く構えて叩きます。太鼓は表と裏の二面に皮が張ってある大太鼓を使っており、両側に一人ずつ叩き手が配置されます。つまり、一つの太鼓を二人で叩くこととなります。

一人は基本となるビートを叩いて、もう一人は独特なフレーズを叩きます。これはおそらく神着地区のオリジナルだと思われます。僕はドラムをやっているということもあり、基本的に西洋音楽を聴く耳でフレーズを分析してしまうのですが、なんとかこの神着フレーズを楽譜に記録してみました。神着フレーズは、二つの部分から成っており、それらが常に繰り返され

ています。楽譜を見てみると、第一フレーズが、五小節で最後の小節が六拍、第二フレーズが四小節で最後のフレーズが五拍になっています。この五拍の部分が特に特徴的で、常に八ビートで乗るこ

神着太鼓の分析楽譜
(安野 太郎)

どのない、この地区独特のノリがここに表れています。

また、一人で延々と叩き続ける事は体力的にも不可能だということで、叩き手は何人もいて、常に交代しながら叩いています。

交代するタイミングは第一フレーズと第二フレーズを二回繰り返してからなのですが、交代するポイントは第一フレーズの途中です。フレーズの切れ目ではないポイントで交代することによって、遠くで音を聴いているだけでは、フレーズに切れ目がないように聞こえるので、延々と一人が叩き続けているように聴こえます。

この一点が、「体力の限界」などというものとは縁の無い何か超越的なパワーが今この音の鳴っている場所に来ているということを表現する為の工夫なのではないでしょうか。僕はこの太鼓によってただの娯楽としての音楽ではない、神事としての音楽という側面を強く三宅島で感じました。

この勝手な分析は本当に私の勝手な分析ですので、全て正しいとは言えません。真相を知っている方は連絡下さい。

(作曲家)
日本大学芸術学部
東京芸術大学講師

安野 太郎

小さな海の生き物たち ○○○との出会い

伊ヶ谷港にあるサンセットハウスで、クジラやイルカの小さな木のストラップが目についた。それは、木目がとても綺麗で、愛らしい表情が印象的なものだった。あまりの可愛いさに感動した私は、作製者の浅沼さんの工房『M's CRAFT』を訪ねてみることにした。

浅沼さんが作製を始めたのは一九九四年のことで、もともと「ものを作る」ことが好きで作製しており、それが友人に好評だったことが販売のきっかけとなったそうだ。工房には、木で彫られたクジラやシャチ、カメなどが並んでいて、見ているだけでも楽しくなる。これらの原木は、二〇〇〇年の噴火前に切られ、保存されていた三宅島の「ツゲ」の木だ。浅沼さんが一つずつ丁寧に手作業で作製しているため、一つひとつ表情が違っているのだが、どれも穏やかで優しい表情をしている。また、「それぞれ形に特徴があるから、シルエットでも分かるところがいいんだよ」と話す浅沼さんからは、作ることで「海」の生き物が好きだということも伝わってきた。浅沼さんによって作られた海の生き物たちは、種類によって動きが違う。それは、浅沼さんが切り取った魅力的な瞬間の

姿であり、その生き物らしさが出ていて、それぞれの違いを比べてみても面白い。

この工房を訪れる人々は、口コミがきっかけでやってくる人や、リピーターが多いそうだ。浅沼さんの「好き」が溢れた工房は、多くの人を惹きつけ、島内外に多くのファンをつくっていくのだらう。コロンとした小さな海の生き物たちとの出会いは、なんだか嬉しい気分がさせてくれた。

(上地 里佳)



『M's CRAFT』
東京都三宅島三宅村神着 100-1

お詫びと訂正

第九号の「富賀神社大祭での受け渡し」記事にて、「第一の鳥居には選ばれた担ぎ手しか入ってはいけない」と表記しましたが、正しくは「第三の鳥居」の誤りでした。訂正させていただきます。